

Title	ジョン・ミラーにおける商業社会と軍事精神
Author(s)	田中, 秀夫
Citation	経済論叢 (1993), 151(4-5-6): 42-61
Issue Date	1993-04
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/44882">http://dx.doi.org/10.14989/44882</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第151卷 第4・5・6号

---

中核企業によるサプライヤーのリスクの吸収……………	浅沼萬里	1
	菊谷達弥	
ジョン・ミラーにおける商業社会と軍事精神……………	田中秀夫	42
香港をめぐる内外銀行の過渡期戦略……………	佐藤進	62
アジア NIEs 工業化過程の		
政治経済学研究(2)……………	宋立水	84
テレコム・エコノミックスにおける		
公的規制をめぐる(1)……………	西田達昭	105
現代日本パソコン市場における IBM の		
国際マーケティング……………	佐久間英俊	120
組織環境認識の視点……………	崔俊	141
韓国資本主義論争の性格……………	李東碩	161
ドイツ民主共和国の経済とコンビナート(1)……………	北村喜義	186
中国経済と香港……………	姚国利	213

学会記事

---

平成5年 4・5・6月

京都大學經濟學會

## ジョン・ミラーにおける商業社会と軍事精神

田 中 秀 夫

### は じ め に

ミラーの主著『イングランド統治史論』の第二版（1803年）の第4巻は、商業社会と軍事精神の関係を論じた興味深い論文「勇気と忍耐（剛毅）」（courage and fortitude）を、第6章「一国民の道德に対する、商業と製造業、および富裕と文明の影響」の第1節として収録している。この巻は、ミラーの死後、甥のジョン・クレイグ（John Craig）によって編集され出版されたものであるが、ミラーのこれらの主題に関する最終的な見解が示されていると思われる。もちろん、遺稿の再録であるから、この第4巻の多くの他の部分と同じく、この部分にも遺稿にまつわる諸問題が残されているであろう。この第6章は、第1節で「勇気と忍耐」を論じたあと、第2節で「真面目と節制」（sobriety and temperance）、第3節で「正義と寛大さ」を論じ、全体としてミラーの道德感情論をなしているとみることもできる。（1803年版第4巻の目次には、この第3節のタイトルが抜け落ちているが、1818年版では訂正されている。）

いずれ劣らず興味深い論説であるが、本稿では、この第1節をなす「勇気と忍耐」と題された論説を、前稿まで論じてきたことがらとの関連を前提として、とりわけスミスとの異同に注目しながら、読む作業を行い、スコットランド啓蒙末期の軍事論、軍事精神論としてのミラーの議論と思想の特徴を明らかにしたい。

## I 勇気と忍耐——徳としての差異と動機

ミラーは勇気と忍耐 (courage and fortitude) の区別と定義から議論を始める。「勇気と忍耐は、若干の根本的特徴において類似しているけれども、容易に明確に区別できる徳である。勇気と忍耐は異なる場合に必要となり、また同一人物に必ずしも備っていない。勇気は将来の、ある程度不確実で、危険と称される、何らかの大きな害悪に対処する堅固な決意にある。忍耐は現在の苦痛ないし不安を確固たる断念の心をもって耐えることにある。」<sup>1)</sup>したがって、勇気は能動的で、忍耐は受動的である。勇気を妨げるのは恐怖である。忍耐の発揮を妨げるのは「わたしたちの境遇の何らかの快適な状況を思い出すことによって、反省能力を破壊し、現在の苦痛を相殺できなくさせる心の弱さ」である。大きな災難は勇気の対象であり、「勇気の徳のもっとも明白な勝利は死の恐怖の克服において明らかとなる。」<sup>2)</sup> 忍耐は悪の長期に渡る継続に耐えることに示される。すなわち、嘲笑、恥、失望に苦しみ、多数の心痛に耐えることにおいてである。

勇気も忍耐もそれを発揮させる事情によって増進される。「習慣の力」によってこの二つの徳は鍛えられ、最初は恐ろしく困難であった努力と苦しみに慣れることになるからである。

別の観点からすると、この二つの徳は正反対の事情によって増進される。「あるひとは、かれの隣人がかれの行動を注視しているという考慮、そして生き生きした感受性でかれの感情に入ることによって、かれらはかれの勇気を褒め讃えるか、かれの勇気の不足をもってかれを過小評価し軽蔑するであろうという考慮から、自らを危険に晒すようにかきたてられる。」<sup>3)</sup> 決闘は「名誉感」から行われる。すなわち「他人によく思われたいという、そして軽蔑と不名誉

---

1) Millar [1803], Vol. 4, p. 176

2) *Ibid.*, p. 177.

3) *Ibid.*, pp. 177-8

を避けたいという欲望」からである。勇気の発揮においては名誉感が大きく作用し、多くの場合、主要な動機となる。

他方、「わたしたちの忍耐は人間愛 (humanity) の不足によって増進され、一緒に暮らしている人々のきわめて美しい同胞感情によって減じられる。」人間愛の不足というのは、親密さの少ない遠い人間関係の場合のことであって、ミラーは次のように説明している。「わたしたちの苦悩においては、親密な友人の同情と共感がわたしたちの苦難にたいするわたしたちの感受性を目覚めさせるのであり、わたしたちを無益な悲嘆にくれさせるのであり、そして嘆きと落胆のありとあらゆる弱さに屈服させるのである。しかし、遠い知人仲間の間ではわたしたちはこのような優しさを恥じ、自己規制してわたしたちの感情を隠そうとする。……このようにしてわたしたちは、身の回りの人々の一般的基準に行動を適合させることによって、甘え (indulgence) か自己規制かの習慣を獲得するのである。」<sup>4)</sup> 親切で愛情深い仲間の間では、仲間の同感と支援によりかかるが、冷たく無関心な交わりの中では、その程度に応じて控えめとなり、耐えることを学ぶ。「このような努力の継続によって、わたしたちは自分の情念をますます統制するようになり、苦痛ないし不安な印象にたいする感受性を温和にすることができるのである。」<sup>5)</sup>

この引用文に注記してミラーは『道徳感情論』を挙げていることから、ミラーが情念の統制、自己規制のメカニズムの理解をスミスに負っていることは明らかだが、しかしミラーの「同感」(sympathy) の概念は、スミスのように入念に彫琢された独特の概念ではなく、同情とあまり違わない。確かに自己規制は織り込まれているが、ミラーはスミスの同感論の継承者であると言うのは言い過ぎかもしれない。(だとすれば、ここでは sympathy は同情と訳出すべきであろう。)

以上のような考察を踏まえて、ミラーは述べる。「あるひとが、多かれ少な

---

4) *Ibid.*, pp. 178-9.

5) *Ibid.*, p. 180.

かれ、こうした二つの状況のいずれかに置かれるのにしたがって、この点で、それに適した気質と性質の違いが、一般に観察される。』<sup>6)</sup> 愚かな親によって甘やかされている子供は、気難しく、だだをこねる。たまたま放っておかれたその兄弟は忍耐強く男らしくなるであろう。長い病気と肉親の常時の世話によって、スポイルされた子供と同じ状態に陥ったひとは多い。女性の場合は逆である。

「おそらく歳をとっているか、身体的な弱点ないし不利をうけている多くの個々の女性は、えてして僅かしか注目と同情を寄せられないので、人生の面倒と苦しみも多くを、黙って孤独に耐えるように強いられるし、また度々、我慢して静かにのみならず、快活かつ英雄的な断念の気持ちで、自らの運命に服すように教えられるのである。男性がより多く勇気を持っているとすれば、女性は疑いもなく優れた忍耐によって区別される。』<sup>7)</sup>

## Ⅱ 文明の発展と徳の変化

以上の一般的考察を踏まえて、ミラーは次に、文明の発展はこの二つの徳にどのような影響を与えるかという本題の歴史的考察に入っていく。ミラーは未開社会から議論を始める。

### (1) 未開民族における忍耐の優位

「これらの徳にたいする諸技術と文明の一般的影響を考えると、人類の事情は、社会の幼年期にあっては、勇気より忍耐により好都合であると思われて当然である。』<sup>8)</sup> ミラーによれば、多くの危険に晒され、数多くの苦難や災難に出会う未開人は、ある程度、勇気も忍耐も身につける。恐怖に制止されるということはさほどないけれども、未開人は隣人の賞賛を得ようとして勇気を発揮しようとはほとんど誘われない。というのは、隣人は自分の苦しみに忙殺されて

---

6) *Ibid.*, p. 180.

7) *Ibid.*, p. 181.

8) *Ibid.*, p. 181.

いるからである。他方、不幸にさいしてのかれの忍耐と志操堅固とは、弱さを見せると同情の慰めを得るかわりに軽蔑と嘲笑をまねくということを知って、強められる。

したがって、「未開民族は、世界のすべての地域で臆病で信義がおけないと言われている。もしかれらが間接的手段で目的を達成できれば、かれらはかれらの敵に公然と攻撃しない。かれらは栄光を愛するからではなく、勝利の利益を得るために、あるいは復讐心を満たすために戦うのである。かれらは自らの憤りを友好の仮面に隠す。そして攻撃準備ができるまで、悪意を心に抱くようには思われない。」<sup>9)</sup> こうしてミラーは啓蒙思想家の多くと同じく、そしてルソーと対立して、とりわけルソーの名前と結びついて流布されていた高貴な未開人の観念を退けるが、忍耐については次のように未開人に能力を認めている。「かれらの英雄的忍耐は普く知られている。きわめて苛酷な拷問においても、かれらは呻き声一つもらすのをいさぎよしとしない。そしてどんな手段によってもかれらが隠すことを利益とする秘密を漏らすように誘惑することはできない。」<sup>10)</sup>

苦しみに耐える能力において未開人が優れているという観察は興味を引くし、また正しいように思われる。ミラーはそのような能力を環境との関連で認めている点で、啓蒙の社会学者でありえている。この観点から文明人と文明社会をみるとき、それらを相対化してみることが可能になるであろう。

## (2) 遊牧と農耕の影響——勇気の増進

遊牧（牧畜）と農耕が導入されると若干の変化が生じることになる。「家畜を放牧したり大地を耕作することによって生活資料を確保する技術の最初の相当な発展は、勇気の徳を増進する明白な傾向をもっている。」それはどうしてだろうか。

ミラーによれば、生活必需品の確保が容易になれば、人間はより大きな社会

---

9) *Ibid.*, pp. 182-3.

10) *Ibid.*, p. 183.

に集合する。そしてこうした社会の状況がより快適であることを発見することによって、かれらは「社会的感情」を育むようにさらに刺激される。「たまたま隣接することになった異なる部族はほとんど絶えず抗争し戦闘している。そして部族民が……相互に知り合うにつれて、かれらは軍事上の功名を競い合うようになり、かれらの相互の張り合いによって軍事的名譽を重んじる感覚を獲得する。」<sup>11)</sup> アラブ人、タタール人、古代ガリア人とゲルマン人、「ヨーロッパの近代国家の基礎をおいたゴート諸部族」は、遊牧と農耕の時代が生みだした「勇氣と士氣」(軍事精神 *martial spirit*) の有名な例である。ミラーの「近代」の用語法は改めて注意を要しないであろうが、これが当時の用語法であった。

「近代のヨーロッパ諸国民はこれらの徳をなおいっそう高い段階に進めた。」<sup>12)</sup> というのは、近代ヨーロッパ諸国民は、隣接する部族の敵意を十分発揮させる状況に長くあったし、異なる小社会のあいだで、軍事的栄光への愛を生みだす競争と対抗が強く存在したからである。かれらの軍事精神(士氣)は、特殊な方向に向かい、騎士道という制度習慣を生みだした。それはジェントリのあいだに、美德の人為的基準と空想的行動様式——いくつかの点で道德の指令と対立する——を導入した。そしてその痕跡は今日でさえ残っており、ミラーはそれがかつて考察したことがあると述べている。これは言うまでもなく、『階級区分の起源』での封建社会論の部分を指している<sup>13)</sup>。

### (3) 商工業の発展と富裕の影響——勇氣と忍耐の衰退

ミラーによれば、勇氣と忍耐という二つの徳に大きな変化をもたらすのは、商業と製造業(手工業)の改善、およびその結果としての富裕である。

「文明の自然の結果である正規の統治組織の確立によって、人類は掠奪から保護され、そして諸技術を育成する諸国民は通常、相互の敵意を避け、友好的通交を維持することが自らの利益であると了解する。かれらの生活様式は、し

11) *Ibid.*, p. 183.

12) *Ibid.*, p. 184.

13) Millar [1771], pp. 54-61, [1781], pp. 91-105. [1806], pp. 72-86.



たがって、未開民族の生活様式とまったく異なったものとなるが、異なった習慣を生み出すのである。安楽かつ平穩に暮らし、平和な職業の遂行に従事するかれらは、かれらを危険に晒したり、苦痛や不安な目に合わせたりするあらゆる企図を嫌悪するようになる。<sup>14)</sup> こうして軍事遠征は好まれなくなり、勇気の徳は衰退するであろう。

他方、このような事情においては、忍耐も衰退するであろう。「富裕で洗練された国民において、諸個人のあいだで発生する生き生きした感受性と美しい同胞感情は、とりわけ忍耐に不都合である。」<sup>15)</sup> 洗練された国民においては、苦難にあって、他人の同情、甘やかしに出会うひとは、自分を甘やかすように奨励される。軽蔑や怒りを気遣って悩む姿を隠そうと努力する代わりに、同情という親切的慰安を得ようと考えて、かれは悩みをさらけ出すのである、とミラーは分析する。

けれども、商業社会においては、勇気も忍耐も衰えるとしても、人間の社会感情に新しい原理が生まれるミラーは考える。「富裕で洗練された国民」においては、「同じ生き生きとした感受性と同胞感情は、より優れた名誉感を生みださせることによって、徳と勇気を増進するであろう、と想定されるかもしれない。社会成員のあいだのより親密な意志疎通によって、人類の生活習慣は穏やかとなり、かれらの社会的性質は目覚め、一般的基準に自らの行動を一致させるように導く引力をますます感じるようになる。」<sup>16)</sup> こうしてかれらは「普遍的な是認と賞賛」を得られるような行為をするように刺激される。けれども、ミラーによれば、状況の変化によってこの是認の基準自体が変化する。ミラーの議論をいささか先走って要約すれば、容易に想像できるように、軍事的・封建的な社会では勇気は徳として尊重されるが、商業社会では正義がそれにとってかわるということである。人間の行動と是認の原理が勇気（積極的徳）から

---

14) Millar [1803], Vol. 4, p. 185.

15) *Ibid.*, p. 185.

16) *Ibid.*, pp. 186-7.

正義（消極的徳）へと移行するという議論は、ミラーがヒュームとスミスの社会哲学の継承者であることを物語っているが、そのことは指摘するまでもないであろう。

ミラーは次のように説明を加えている。すなわち、人間が安全に暮らすようになり、戦闘に従事しなくなるにつれて、軍事的能力を評価しなくなり、かわって「日常の社会状態」(ordinary state of society)においてより有益な他の能力を評価するようになる。「前時代に導入された騎士道から、軍事的名誉の若干の儀式が現在のヨーロッパ諸国民に伝えられてきたし、いまなお無くてはならないと考えられている。紳士と呼ばれている地位と教育のある人たちは、おめおめと侮辱を受けるよりは生命を捨てなければならない。しかし、こうした儀式は長期の慣用の力によって人為的に保存されてきたのであって、商業国民の生活様式に明白に対立するし、ヨーロッパのより文明化された地域では、日ごとに基盤を失いつつあると思われる。」<sup>17)</sup> 決闘は今日では、慣習を重んじるひとによっても、決闘の基礎にある原理を認めるひとによっても、非難されている。それが保持されているのは「古い習慣の専制」による。

こうして、一部の人たちの例外はあるものの、「勇気の徳は、近代ヨーロッパのすべての諸国民にあっては、商業と製造業におけるその国民の進歩に比例して衰退したと思われる。この衰退の最初の顕著な影響は、多くの国民に軍事的労務を捨てさせ、共同社会一般から無差別に集められた職業軍人に国防の負担をゆだねさせたことである。」<sup>18)</sup> この慣行は最初の商業国に導入され、商業発展において続いた他の国でも漸次、採用された。この職業軍は指揮権を与えられた主権者に好都合であったが、「かれらの首席為政者によって集められ維持された傭兵軍に自分たちの自由と権利を侵害されると了解した国民の部分に、警戒心をかきたてないではおかなかった。」<sup>19)</sup> 主権者の率いる傭兵軍に警戒心を

---

17) *Ibid.*, pp. 188-9.

18) *Ibid.*, p. 188.

19) *Ibid.*, p. 189.

抱いたのは、イングランドでいうと1690年代の民兵論者のような共和主義者であることは、改めて述べるまでもないであろう。

そこで、こうした諸国のいくつかでは、常備軍に釣り合わせるために、「国民軍（民兵）」（a national militia）をもつという「愛国的方策」がとられた。しかし、「この種の規制を強制する困難」はそれが「時代精神」に逆行することの十分な証拠である、とミラーは述べている。

民兵軍は商業時代には困難であるというこの見解は、おそらくスコットランドの啓蒙知識人の大方の見解であった。けれども商業時代の風潮に強い危機意識を抱いていたファーガスンなどのモデレートたちはあえてそれを要求したし、モデレートに思想傾向の近いケイムズ卿も交替制民兵案を唱えた。また『国富論』のスマスも、前稿において詳細に検討したように、常備軍の補助、補完として民兵軍を支持していた。さしあたりミラーは上の時代精神を良いとも悪いとも述べていない。しかし、ミラーは考察をさらに進める。

### Ⅲ 商業社会と常備軍

#### (1) 商業社会の価値と軍事

ミラーは事実として、「商業にすっかり夢中になっている国民」は、外国の傭兵軍を用いる傾向があり、その場合、貧しい国家の軍隊を雇って戦闘させるか、貧しい国家の主権者たちに補助金を与え、かれらを名目的同盟者と認めるかであると述べている。これは他ならず、名誉革命以後のブリテン政府が国際的な勢力均衡政策において採用した方策——ヒュームは勢力均衡政策をブリテンにとっては国家独立を確保するためにやむをえない方策であるとして支持した——であり、おそらくミラーの念頭に浮かんでいるのはこれであろう。

しかし、傭兵軍に問題はないのだろうか。勇気については訓練が補うとミラーは言う。「ヨーロッパの傭兵軍の勇気は訓練によって維持されている。すなわち、戦闘の習慣と、各人の胸に軍事的名誉感を強く抱かせる団体〔軍隊〕精神（esprit du corps）とによってである。」<sup>20)</sup>つまり、自然の不足を人為（art）

20) *Ibid.*, pp. 189-90.

が補う。職業軍人は臆病の罰をうけることは不名誉であることを理解し、1, 2回の軍事行動によって、かつての臆病を乗り越えるのである。

「軍事訓練の影響は、諸国民が文明化においてとげた進歩にしたがって、おそらく大きかったり、小さかったりする。洗練された文明国民の軍隊は、軍事的名声への極端な敏感さと、かれらの血気盛んな武勲によって傑出しようとする激しい熱意をその職業から獲得する傾向がある。」<sup>21)</sup> 他方、未開から脱したばかりの国民の軍隊は、組織としての勇猛さをもつ傾向があり、その傾向が危険のさなかでの軍のゆるぎない不動を可能にし、指揮者への服従に満足する気持ちにさせる。前者の好例はフランス軍であり、ロシア軍は後者の好例である、とミラーは言う。

勇氣、士気は訓練が可能とするとしても、にもかかわらず、ミラーは「近代の商業諸国民における軍事精神の衰退は、軍事的職業のそれに対応する地位低下を生みだしてきた」と主張する。文明の発展につれて軍事的職業が漸次的により下層階級に委ねられてきたというのは、スミスもまた指摘したことである<sup>22)</sup>。ミラーはこう述べている。「古代のローマ人と他の有名な諸国民のあいだでは、唯一の評判の良い職業は軍人の職業であったように思われる。近代ヨーロッパのわたしたちの祖先のあいだでは、同じ観念が広まり、いっそう強まりさえした。かれらのあいだでは、自由人だけが軍事の職業に従事し、他のすべて職業は奴隷によってのみ行われた。フランスにおいてはこのような観念の強い痕跡が存在したのであって、最近の革命の時にさえ残っていた。商人は紳士ではなかったし、紳士の地位にあるだれからも罰せられずに公然と侮辱を受けることがあった。医者もほとんど同じ境遇にあった。法律家 (long robe) は紳士と庶民のあいだのある種の間身分であった。そのようなものとして半-紳士と言うべきである。」<sup>23)</sup> このようにミラーは価値観・職業観・階級観の

21) *Ibid.*, p. 190

22) LJB, p. 542, (邦訳, 462ページ)。

23) Millar [1803], Vol. 4, p. 9. この引用文に「最近の革命」とあり、後にスコットランドにおけるカトリック解放法案 (成立は1793年) が断念されたという文章が出てくることから、この論説は

歴史的変化に注目する。

戦争において熟達と優れた行動を発揮した人物として最高の栄光を与えられてきたのは、アレクサンダー大王やカエサルのような人物である。しかし、ミラーによれば、前者はほとんど大胆不敵な狂人に過ぎず、後者は原理原則をもたない道楽者で、祖国の自由を破壊したのである。ミラーは、『階級区分の起源』においてと同じく、ここでも立法者神話を退ける。このような立法者神話の徹底的な破壊は、フォーブズがつとに強調したように<sup>24)</sup>、ヒューム、スミスに代表されるスコットランド啓蒙の重要な達成であったが、ミラーの主張はとりわけ尖鋭であり、ラディカルである。

ミラーは、「商業はついに個人の価値 (personal merit) について他の観念を導入したのであり、人々に異なる尺度で職業を評価するように教えた」<sup>25)</sup>と主張する。ここにミラーが、価値の大転換、軍事的価値から様々な個人の価値への転換を見ていることは重要である。「スウィフト博士は兵士を『かれを攻撃したことの無い同胞を、できるだけ多数殺害するために雇われたヤフー』と定義している」<sup>26)</sup>が、ミラーによれば、この定義は曖昧かつ行き過ぎである。というのは、兵士が雇われるのは「祖国の防衛」のためであって、この目的自体は賞賛すべきものだからである。ミラーが述べていることを敷衍すれば、新しい価値観とは、社会を維持していく上での有益さによってさまざまな職業を評価し、そのひと個人が何をなすうるかによってかれのメリットを評価するということである。したがって、軍事も「祖国の防衛」を目的とする限り、その有益さにしたがって評価されなければならない。

## (2) 戦争と権力者の野心

しかし、ミラーは戦争についてもう一步踏み込んだ考察をしている。「わたしたちの敵を殺すことはその必要性によって擁護されうるけれども、だからと

この執筆は1790年から92年のあいだである、と推定できるであろう。

24) Forbes [1954], [1975], [1976].

25) Millar [1803], Vol. 4, p. 192.

26) *Ibid.* p. 192

いってこの公共的義務が望ましい労務であるということにはならない。それは、厳密な正義にかろうじて矛盾しない苦痛な仕事であって、その遂行は人間愛 (humanity) にとって嫌悪をもよおさせるものである。」<sup>27)</sup> しかし、軍事的職業に雇われて従事している人々は、かれらが関与するかもしれない戦争の正義自体を疑問にすることは許されない。なぜなら、命令に背くことは上官抵抗罪 (mutiny) となるだろうし、危険な任務でそうすることは臆病者という汚名をきることになるだろうからである。けれども、「どの戦争においても、職業軍人の半数は不正を支持して戦っているに相違ない。というのは、剣で争いの決着をつける決意をした二つの敵対する国民のうち、一方だけが正しい可能性があるにすぎないからである。」

それだけではない。さらにミラーはこう続ける。「しかも双方が間違っていることも容易に起こりうる。実際、諸国民が行う戦争の大部分は、両当事者の過失から始まる。すなわちそれらは、国王あるいは国王の大臣の貪欲ないし野心から生じるのであって、かれらは私的な利益を動機として、また偽りの口実で、それぞれの国家を無益な無根拠な争いに巻き込むのであり、際限もなく大量の国民の血と財宝を浪費するのをためらわないのである。」<sup>28)</sup> この発言は非常に注目すべきものである。大多数の戦争は権力保持者の野心から生じており、それは本来なくてすむはずのものである。とすれば、国民は、権力者、国王やその大臣の執政に警戒を怠ってはならないであろう。このような視点をもって歴史と現実政治を眺めていたミラーはカントリ・シンパサイザーであるほかはないであろう。ミラーによれば、「傭兵軍は、しばしば、大臣が自らの権力の保存のために必要と考える汚い仕事のなかの最も不幸な部分で利用される、大臣の理性を欠く手先である。」<sup>29)</sup>

こうした発言が念頭においてるのは、特定はできないけれども、とりわけ

---

27) *Ibid.*, p. 193

28) *Ibid.*, p. 194.

29) *Ibid.*, p. 194

イングランドとブリテンの近時の事態であることは、ほとんど確実である。大臣の手先としての傭兵軍批判は、いま指摘したようにカントリの言説であるが、もちろん、ミラーを単なるカントリ・イデオログとしてはならない。カントリ・イデオロギーを越えて、ミラーは大多数の戦争に正当性を否定し、その背後に正当性なき権力者の私益の追求を見ている。

ここでミラーは、権力者の私益追求を国民の公益とどのように調停することができるかという問題に直面しているはずである。この問題に、スミスは権力者を土地所有者階級から選ぶことをもって解答とした。その理由は、周知のように、土地所有者階級の利益は公益と対立することが最もすくないというものであった。社会の富裕の増進は、地代を増加させるから、土地所有者階級の特殊利益は「社会の一般的利益と密接不可分に結びついている。」<sup>30)</sup> ミラーの視点はおそらく、それとは異なり、あるいはよりオーソドックスであって、本稿でとりあげているエッセイの範囲を越えてふれるとすれば、それは国民による政府の規制の強化というものであったと思われる<sup>31)</sup>。言い換えれば、ミラーは、知識の普及につれて政治の原理としての功利の原理が広まることに期待をした「公共の政策をそれらの効用という基準にしたがって吟味する流儀が、今ではきわめて普遍的となっている。それは中流階級の大部分とともに、知的サークルに浸透しているし、明らかに下層身分の人々にまで伝わっている。」<sup>32)</sup> したがって、ミラーは、スミスと違って、このような世論の高まり、政治意識の普及が、権力者の私利私欲追求にチェックをかける可能性に期待していたといっ

てよいだろう。

#### IV ブリテンの現状

ミラーは現在のブリテンについて、こう述べている。「ブリテンが商業と農

30) WN, p. 265 (邦訳 I, 403ページ)

31) Millar [1803], Vol. 4, p. 301.

32) *Ibid.*, p. 305.

造業で他のヨーロッパ諸国を凌いだ限り、ブリテンの住民はその軍事的性質において目だって衰えたと思われるし、軍事的才能も目立って評価しなくなったと思われる。<sup>33)</sup> ブリテンの住民は、「我慢づよい勤勉」は必要だが勇気は必要でない「平和な諸技術」——この用語法に注意——に隣国以上に携わっている。かれらは儲け仕事に夢中であるが、儲け仕事は蓄積の見込みを与えるけれども、富の蓄積というものは軍事行動に従事するために一時的に放置しておくだけで全くだめになってしまう。したがって、かれらの優越した富は、危険と不確実性を伴う事業をやりにくくさせる傾向がある。つまり、保守的にならせる。富の獲得が幸福を増すことより、現在の財産のある境遇から一文無しに転落する悲惨のほうが大きい。従って、慎慮 (common prudence) は危険を避け、現状維持をするように求める。

「このような事情がどの程度、本島の住民を隣人たちより戦争を好まなくさせたか」を調べてみよう。ミラーは住民を三分して考察する。

(1) まず海軍と陸軍は明らかである。「常備軍の士気と不撓不屈さは訓練次第であり、少なくとも非常に優れた訓練はあらゆる不利を克服するであろう。……偉大なプロシアの国王の軍隊が世界で最上となったのは優れた訓練によってである。<sup>34)</sup> ブリテンの船員たちは、海事問題の遂行に関する優れた訓練によって、オランダの船員を除いて、どんな他の国の船員をも圧倒している。もし、ブリテンの陸軍が大陸の陸軍のあるものにすべての点で劣っているとすれば、その理由の一部は軍事の遂行により不都合な「国民の境遇と生活様式」のせいであり、また一部は将校たちが専門の科学的知識を獲得するさいの障害のせいである。

(2) 名誉の堅持を必要とする紳士の性格は、ブリテンでもヨーロッパのすべての文明国でもほとんど同じであって、一般的基準に従って形成されている。この種の人々の勇気はある種の訓練にかかっている。

---

33) *Ibid.*, p. 194.

34) *Ibid.*, pp. 195-6.



(3) 国民大衆 (great body of the people) はすべての軍事的観念から遠く離れているように思われる。「かれらは軍事的職業を最低にしか評価しない。商売人の息子が軍隊に入隊するとき、かれは迷って身の破滅を招いた放蕩者とみなされる。」<sup>35)</sup> ジェントリのあいだでさえ、早くに軍隊生活を希望した者は別とすれば、他の職業によって身を立てる資質がないと思われる者が、陸軍ないし海軍に入るのである。

さらにミラーは民衆について次のように論じている。「イングランドの商業都市は、それらが独立した状況にある結果、下層民の騒動に非常に溺れているけれども、それらの下層民は多くの場合、取るに足りない軍隊で容易に鎮圧される。こうしてローマ・カトリック教徒の特権を拡張する法案はロンドンと全国で非常な激怒をかきたてたのであるが、しかし下層民がその方策の反対に動かされた憤激にもかかわらず、かれらは一握りの軍隊によって簡単に威嚇されて制圧されたのである。しかるに、より貧しく未開な国であるスコットランドでは、民衆は反対を貫いたために、大臣は大いに渋ったけれども、法案を断念せざるをえなくなったのである。」<sup>36)</sup>

これは、後進国の民衆のほうが大胆で勇気があるという主張であろう。スコットランドの民衆がカトリック解放に反対したのは、スコットランドの支配的な宗派がノックスの系譜を引くプロテスタント、長老派であったことから理解するのが常識であろうが、ミラーはその点には触れていない。

ここで述べられている事件は1779年の2月のエディンバラとグラスゴウにおけるカトリック解放反対運動のことで、それはロンドンでのゴードン暴動の先駆けとなった<sup>37)</sup>。

この時のカトリック解放法案の狙いは、カトリック教徒の従来の差別を一部廃止することとひきかえに、アメリカ出兵の人員をカトリック教徒からまかな

---

35) *Ibid.*, p. 197.

36) *Ibid.*, p. 198.

37) Logue [1976], p. 6, 146.

うことにあった。スコットランドを除外してイングランドの法案は1778年に成立する。スコットランドの法案は遅れて1793年に成立することになる。

スコットランドではロバートスンとかれの仲間の穏健派が人道的観点から解放を支持し、ギリスなどの人民派が反対に回った。スコットランドのカトリックは少数で、貧困な北西部においやられ、政治的にも経済的にも非力であった。ジャコバイトの反乱に加担した汚点が依然として差別を正当化していた。こうして1778年から翌年にかけて、スコットランドにおいてカトリック解放の是非をめぐる論争が繰り広げられることになる。この1778-9年の「カトリック排斥」問題は、やがて10年余りの時を経て1793年の法律として決着する。礼拝の自由と私有財産を認めるこの法律は、10年余り経ったこの時にはほとんど反対もなく成立したが、その理由はグラスゴウの綿織物業の発展が安価なカトリックの労働力にますます依存するようになったこと、ジャコバン主義と無神論への恐怖、フランスのカトリックへの共感、フランス革命の危機による軍の増強の必要などであった<sup>38)</sup>。そうだとすれば、ブリテンの政府と同じくスコットランドの統治階級も、スコットランドが大きな利益を得ることができるという目算が立って初めてカトリックの解放に賛成したのである。それは、しかしながら後日譚であるし、またミラーの論点ではない。ミラーの論点は、国民の臆病さということである。

「1745年に、全く訓練されていなければ装備も悪い、4, 5千人程度のスコットランド人の反逆者の一群がイングランドの相当の地域を攻略した。そして、イングランドはハノーヴァ家にあ着をもっていたけれども、フランダースで任務についていた軍隊がその目的のために帰国するまで、あえてかれらに対決する集団にかれらは出会わなかった。イングランドの人々は、かれらの宗教と自由が危険に晒されていることを知ってはいたが、その時、戦場に現れることを適切とは思わなかった。すなわち、かれらは、外部の暴力が最も接近すると、殻に閉じこもり、危険が去るまでその避難所から出ることができない非力

38) Sher [1985], pp. 277-80, 294 note.

で臆病な動物の例をまねたのである。」<sup>39)</sup>

ミラーが、ジャコバイトに共感を寄せていないことも明白であるが、イングランドの国民の臆病さを問題にしていることは明らかである。問題の焦点は自由に置かれている。自由を守ることを常備軍に委ねてよいのか。この時は、結果的にジャコバイトの反乱は鎮圧され、イングランドの自由は守られたが、問題は残されている。「行政の行動にたいする怒りで燃え上がって、大声で騒いで不平不満を示すイングランド国民の大多数が、大臣の面前でマグナ・カルタの旗を振り、言論・出版の自由を利用して大臣をあらゆる側から悩ませるのであるが、ちょっと固い決心で、統治のマシーンを賢明に使うことによって、少しばかり時をえた嚴重さを示すことによって、かれらが完全に制圧され完全に従順になった、といったことをわたしたちはどんなに頻繁に見てきたことか。」<sup>40)</sup> ここでミラーの念頭にあるのは「ウィルクスと自由」のような運動であろうかと思われる。

ミラーが言わんとするのは、この臆病さにも効用があるが限界もあるということである。すなわち、肥大した富による臆病は「豊かな商業国民」の弱みとなるが、その効用は、公共の権威の束縛を強化することによって「過度の独立精神」を相殺する点にある。そして個人の富はかれの平穏で秩序ある行動の担保であるが、しかしまたその富は野心的な君主を刺激して「祖国の自由」を覆させるかもしれない。したがって、この臆病さには限界がある。「もし政府の抑圧が財産の破壊を狙うまでになるとすれば、商業国民はおそらく真っ先に、恐怖の束縛を断ち切り、かれらが過度なまでに執着している対象を守ろうとする必死の武勇心に動かされるであろう。」<sup>41)</sup> こうしてミラーは最後には、商業国民についてある種のオブティミスティックな結論に辿り着く。

したがって、「巨大な商業的富裕の結果は、権力者のもとにあって、警戒と

39) Millar [1803], Vol. 4, pp. 198-9.

40) *Ibid.*, p. 199.

41) *Ibid.*, p. 200.

長い忍苦を生み出すことであるが、しかし人類の基本的権利を明らかに覆すような専制政治の行為にたいする力強い反対を究極的に保証することである。これは、実際、人々がかれらの政治的統治者に負っている服従の正しい手段を示すと思われる。というのは、ささいな取るに足りない不平に基づいて国民が抵抗を頻繁に繰り返すことほど、社会の幸福と両立しないことはないからである。そして主権者の篡奪に抵抗する現実的必要があるとき、かれはかれの臣民に、かれらの特権を守って結合することを十分に正当化されるという警告を与えるのに十分な時間をかけて、仮面を脱ぎ捨てるのが普通なのである。<sup>42)</sup>

ささいな不平を理由とする政府への抵抗を退けるとともに、人類の基本的権利を否定したり、財産を破壊するような専制政治にたいする抵抗を公然と認めたこのミラーの主張は、抵抗権論の明示的表明として、ヒュームやスミスの穏健な言説からの離脱とみるべきかもしれない。商業社会は、その富裕によって奢侈に溺れ衰退するというのではなく、その富裕によってむしろそうした基本的権利をまもる抵抗を可能にするというのがミラーの結論である。

## 結 わ り に

こうして、本稿はミラーの結論まで辿りついた。ミラーの議論は、第一義的に、文明と商業の発展との関連で勇氣と忍耐という徳性がどのように変化するかを問題にする徳性論であって、軍事論ではない。けれども、副次的ながら軍事組織の変化についてのミラーの見解も知ることができた。歴史的傾向として民兵軍から常備軍への発展はミラーも必然と考える。そしてブリテンの現状がかかえている問題として、国民の富裕の背面としての武勇心の衰退が、モデレートやスミスと同じように憂慮すべきことがらとして指摘されたが、しかしミラーはかれらと違って、国民に軍事教練を施せとも、民兵軍を組織して常備軍の補助とすべしとも述べていない。にもかかわらず、ミラーには権力者に対するきわめて強い警戒心があり、他方また商業国民は財産と基本的権利を守る

42) *Ibid.*, p. 201.

ことにおいては、権力者にたいして果敢に闘うであろうという国民の精神にたいする信頼がある。この点にミラーのユニークさが見られるであろう。ミラーはラディカル・ウィッグであり共和主義者であったことが、本稿を通して証明されたように思われる。スコットランド啓蒙は末期において、ミラーにひとつのラディカルな、しかし名誉革命以来の国家の基本構造を基本的には尊重する、政治思想を生みだすことができた。それは、ヒュームやスミスの科学精神と基本思想を受け継ぎながら、それをロックの自然権思想や共和主義の伝統と統合しつつ活性化し、そうすることによってスコットランド啓蒙の遺産を保守するのではなく、政治的、精神的に後退しつつあった時流と時代精神に対決して、変革を志向するというもので、その意味でミラーの政治思想は前進性を堅持した雄渾な精神に満ちていたように思われる。もちろん、このような総括は、まだ必要なテキスト分析を先取りするものなので、時期尚早であるが、そのような印象は否定し難いものがある<sup>43)</sup>。

#### 参考文献

- Millar, John (1771), *Observations concerning the Distinction of Ranks in Society*, London.
- [1773], *Observations concerning the Distinction of Ranks in Society*, the Second Edition, greatly enlarged, London.
- [1781], *The Origin of the Distinction of Ranks; or, An Inquiry into the Circumstances which give rise to Influence and Authority in Different Members of Society*, 3rd. edition, corrected and enlarged, London (the same in 1779).
- [1806], 4th ed. corrected, prefixed *An Account of the Life and Writings of the Author*, by John Craig. Edinburgh. (Reprint 1990, Toemmes)
- [1787], *An Historical View of the English Government*, London.
- [1803], *Ibid.*, 4vols. (London.)
- [1818], *Ibid.* 4th ed. 4 vols. London.
- Smith, Adam [LJA, LJB], *Lectures on Jurisprudence*, ed. by L. Meek and P. Stein, Oxford, 1978. (高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』, 日本評論社, 1947年)

43) ミラーにおける急進主義についての興味深い解釈は Ignatieff [1983] に見られる。

- [WN], *The Wealth of Nations* (1776), Oxford, 1976. (大河内一男監訳『国富論』, I, II, III, 中公文庫, 1978年)
- Forbes, Duncan [1954], Scientific Whiggism: Adam Smith and John Millar (1954), in *Adam Smith, Critical Assessments*, ed. by J. C. Wood, Vol. 1, 1984.
- [1975], *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge.
- [1976], Sceptical Whiggism, Commerce and Liberty, in *Essays on Adam Smith*, ed. A. S. Skinner and T. Wilson, Oxford.
- Ignatieff, Michael [1983], John Millar and Individualism, in *Wealth and Virtue*, ed. by I. Hont & M. Ignatieff, Cambridge. (邦訳『富と徳』, 未来社, 1990年)
- Logue, Kenneth J. [1979], *Popular Disturbances in Scotland 1780-1815*, Edinburgh.
- Sher, Richard B. [1985], *Church and University in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U. P.

(1993年1月)